

「コンフリクトの人文」セミナー 第16回

<報告1>

イスラエルにおける捕囚：ユダヤ教超正統派の
反シオニスト・イデオロギーとその変容

大阪大学大学院人間科学研究科 GCOE 特任助教

赤尾光春

<要旨>

19世紀末に誕生したシオニズム運動は、ユダヤ教における帰還神話を換骨奪胎することで、世俗国家イスラエルの建国を実現させた。それゆえ、「ユダヤ人国家」の思想的根拠をユダヤ教そのものに遡ろうとする言説が絶えない。しかし、伝統的なユダヤ教に忠実なユダヤ人の多くは、少なくともイスラエルの建国までは、シオニズム運動に対するもっともラディカルな批判者であり反対者となってきた。本報告では、ユダヤ教超正統派による反シオニズム運動の歴史的展開を概観しながら、現代ユダヤ教におけるシオニズム／イスラエル批判がもつ今日的意義について考察してみたい。

<報告2>

ユーゴスラヴィア解体と文学—アンドリッチの
評価の変遷をめぐって

大阪大学大学院人間科学研究科 GCOE 特任研究員

奥彩子

<要旨>

1991年からのユーゴスラヴィア解体の流れは、この地域の文学に大きな影響を与えた。政治的軋轢から逃れるため、あるいは、政治的な態度表明のために、国外へと移動した作家、言語を切り替えた作家も少なくない。国家の解体は、現在の作家の活動に影響を与えただけではなく、過去の作家の評価も大きく変化させた。1961年に旧ユーゴスラヴィアで唯一ノーベル文学賞を受賞した作家イヴォ・アンドリッチ（1892-1975）も例外ではない。今回の発表では、国家解体によって生じたコンフリクトがどのような影響を文学に与えたか、アンドリッチの評価の変遷に着目しながら考察したい。

日時 2008年7月11日（金） 16:20 ～ 18:20
会場 大阪大学大学院文学研究科（豊中キャンパス）
文・法・経講義棟1階13教室（参加無料）
（<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/about/map/toyonaka.html> に地図があります）

問い合わせ先：
大阪大学大学院人間科学研究科人類学研究室
e-mail globalra@hus.osaka-u.ac.jp
電話 06-6879-8085
06-6877-5111

【報告者略歴は裏面をご参照ください】

【報告者略歴】

赤尾光春 （あかお みつはる）

2005年、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了、学術博士。在イスラエル日本大使館専門調査員（2004-2006）、スラブ研究センター学術研究員（2006-2008）を経て、2008年3月より現職。専門はユダヤ文化研究、文化人類学。主な業績は、“A New Phase in Jewish-Ukrainian Relations?: Problems and Perspectives in the Ethno-Politics over the Hasidic Pilgrimage to Uman” (East European Jewish Affairs, Vol.37-2, 2007)、『ディアスポラから世界を読む』（共編、明石書店、近刊）など。6月には、ジョナサン&ダニエル・ボヤーリン著『ディアスポラの力：ユダヤ文化の今日性をめぐる試論』（早尾貴紀との共訳、平凡社）を刊行。

奥彩子 （おく あやこ）

1999-2000年、ユーゴスラヴィア政府給費生としてベオグラード大学に留学。2002年、京都大学文学研究科スラブ語学スラブ文学専攻修士課程修了。2008年、東京大学総合文化研究科地域文化研究博士課程修了、学術博士。専門は、旧ユーゴスラヴィアを中心とする東欧文学。訳書に、ダニロ・キシユ『砂時計』（松籟社、2007）。主要論文は、「ダニロ・キシユと中央ヨーロッパ」（『スラヴ研究』第55号、2008）、「ユーゴスラヴィアにおける1970年代の文学論争」（『東欧史研究』第30号、2008）など。